



涌小通信

知内町立涌元小学校
～重点教育目標～
主体的・対話的に学び、
自らを磨き、高め合う子
平成30年7月20日発行

夏休みにも大いに『チャレンジ』を！ ～結果のみに着目せず、取組の過程を認め、励ます～

本日、無事1学期が終了いたしました。子どもたちが元気に明るく学校生活を送ることができたことに、保護者・地域の皆様に心より感謝申し上げます。

また、明日から始まる夏休みが、病気やけが、交通事故や水の事故などがなく、子どもたちにとって有意義な夏休みになるように、皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



さて、皆さんはロシアW杯(ワールドカップ)をご覧になったでしょうか。とり分け日本代表の活躍は日本中を元気づけてくれました。私も、午前3時からの中継放送を一喜一憂しながら見ていました。と同時に、前回のブラジルW杯での日本代表の試合のことを思い出しました。

前回のブラジルW杯は、今大会の日本代表以上に活躍が期待されていたので、私も結果を大いに期待していた一人でした。しかし、結果は1分2敗の予選最下位となり、あえなく予選リーグ敗退となってしまいました。期待が大きかった分、敗北感や失望感を感じたのは私だけではなかったと思います。大会後は、日本サッカー協会に対する批判、監督の戦術に対する批判、選手への批判がネット上に渦巻くこととなりました。

結果だけを見れば、期待を裏切るものであり、「失敗の大会」であったと私は思っていました。しかし、ネットでの批判が渦巻く一方で、日本サッカー協会技術委員会からこのブラジルW杯で試みた「チャレンジ」についてのレポートが発表されました。

自分より強い相手と対戦するときにはサッカーでは、守備を固め、相手の一瞬の隙を突いたカウンター攻撃を仕掛けるのが定石です。過去の日本代表も定石通りカウンター攻撃で戦ってきました。しかし、ブラジルW杯では『日本人のサッカーを世界に示す』を目標に掲げ、守備を固めるだけのサッカーから、前線から積極的にボールを奪いに行き、ダイレクトパスや短いパスを繋いでゴールを奪う、という日本人の特性である敏捷性や組織力を最大限に生かしたサッカーで世界に「チャレンジ」したと言うものでした。もしも、勝つためのサッカーをしていたならば、結果は違っていたかも知れません。

日本サッカーが世界と戦うための新たな一歩である、日本サッカーの「チャレンジ」がそこにあったことを私は初めて知りました。結果のみに着目するのではなく、物事の本質をしっかりと見極める力、見抜く力が大切であることを感じた出来事でした。



「チャレンジしましょう。」と簡単に言いますが、「チャレンジ」してみようと思うためには、明確な目標と環境づくりが大切です。中でも、支持的風土が整っていることが必須条件です。

学校でも、子どもたちが「チャレンジ」できる環境づくり、つまり、失敗してもその取組や努力の過程を認め、励ましてくれる支持的風土・雰囲気がある学年・学級づくりを目指しています。

ご家庭においても、この夏休みに、お子さんの「チャレンジ」しようとする意欲や姿勢を認め、励まし、お子さんの背中を後押しして欲しいと思います。(ただし、無謀なチャレンジや無責任なチャレンジのことではありません。)チャレンジの結果、きれいにできなかったり、時間がかかってしまったり、時には失敗してしまうことがあるかも知れませんが、大人(教師や親)がしっかりと子どもの「チャレンジ」を見守り、意欲や努力を認め、評価する確かな目(力)をもつことが、子どものチャレンジ精神を育みます。

チャレンジするって
素晴らしい!

子どもに関わるすべての大人が、子どもたちの「チャレンジ」を認め、励ましていきましょう。